

**未来を先取りすることについて**  
**主体と身体に関する研究**  
**On looking ahead to the future**  
**A study on the subject-body relationship**

○杉崎庄太郎<sup>1</sup>, 大川碧望<sup>2</sup>, 佐藤慎也<sup>2</sup>

\*Shotaro Sugisaki<sup>1</sup>, Aono Okawa<sup>2</sup>, Shinya Satoh<sup>2</sup>

When I'm typing at my computer, I sometimes feel like my fingers are moving before my mind can think. It is generally accepted that the human body begins with a desire to move something, and that this becomes a signal that reaches various organs to move, but from the text of the poet Paul Valéry, It can be seen that the subject and the body can be separated, and that the gap between perception and reaction plays a major role. Due to this discrepancy, the subject anticipates the “future” of the next action, turning the “present” into the “past”.

### 1. 研究背景と目的

パソコンに向かって文字を入力しているとき、頭で考えるよりも先に指が動くような感覚に襲われることがある。キーボードを叩く指は、私の一部でありながら「私」という主体を追い越し、独立した対象として動き出し始める。

本研究では、主体と分裂した身体の状態について研究することで、「私」と「世界」との間に存在する対象としての身体の機能を文献調査から明らかにする。また、主体と身体の関係のみならず、ベルクソンの思想を引用することによって、世界と知覚の関係を再解釈し、主体と身体との関係に知覚を接続させる。

## 2. 身体の分離と時間論

### 2-1. ヴァレリーの「持続」

人間の身体は、はじめに意思が存在し、それが信号となり、さまざまな器官を到達することで動く、というのが一般的な身体の仕組みのイメージである。しかし、その仕組みには例外が存在する。

詩人であるポール・ヴァレリーは、明確な行動を意識すること自体に、意識と身体の間はずれが生じると述べている<sup>1)</sup>。研究者の伊藤重沙は、針に糸を通す場合を例に取り上げ、「針に糸を通す」というイメージが先行し、そのイメージを遂行する形で身体は挙動すると述べている<sup>1)</sup>。ここで重要となるのは、主体は未来のイメージを想像している点である。主体はイメージによって来たるべき未来を先取りし、そのイメージに向かって身体は動き、その未来へと追いつこうとする。その身体の動きに対して主体は、そのイメージを逐一修正する。その絶え間ない修正により、主体と対象の分離不可能性が極まってしまう。また、ヴァレリーは、このような状況では、主体と切り離された対象は持続によって受肉し、徐々に主体と切り離すことができなくなってしまうと述べている<sup>1)</sup>。ここで、その対象を主体と切り離されたものでなく、主体の一部である身体とし

て認識すると、身体とは、主体と分離可能な対象と捉えることができるだろう。そして、それを潜在化しているものこそが主体のイメージの精密な修正である。そういった意味では、主体と身体の分離が最も顕在化するの、行為が遂行される以前のイメージが誕生した瞬間といえるかもしれない。

### 2-2. 時間の認識と操作

思想家である内田樹は、一つの文章が読み終わるよりも先に、そのセンテンスがどう終わるかがわかるときがあるという体験を、ラカンの過去の記憶は前未来形で思い出されるという記述を用いることによって説明を試みている。内田は、主体はじつは「センテンスをもう最後まで読み終わって」おり、「現在」とは回想された「過去」なのではないかと述べている<sup>2)</sup>。ラカンのいう前未来形とは、未来のある時点で、すでに完了した動作や状態を記述するものであり、ここで内田は過去を思い出すこと（回想）と過去の出来事を語ること（前未来形）を同一化することによって、主体と身体との間にずれが生じることを強調している。これによって主体のイメージと、その未来の先取りによって、現在が過去となることの説明を可能にしている。

## 3. 未来の先取りとその保存

### 3-1. 知覚—意思—行動

主体と身体との関係の出発点となる意思は、そのみで存在するのではなく、世界からの刺激である知覚によって発生する。哲学者であるアンリ・ベルクソンは、知覚と行動の間に生じる時間的なずれを遅延<sup>3)</sup>と呼び、それを意思へと敷衍する。ここで遅延は、知覚というインプットによって想定される行動の選択肢として機能する。つまり、意思は知覚と行動とをつなぐとともに、最良の選択肢を決定するまでのロード時間として捉えられる。

### 3-2. 純粋知覚と時間イメージ

それでは、前章において検討した未来を先取りすること

1:日大理工・院(前)・建築、2:日大理工・教員・建築

は、知覚とどのような関係を結ぶのだろうか。ベルクソンは、知覚の所在は対象となる物質の側に存在すると述べている<sup>3)</sup>。対象のある場所と知覚のある場所が一致するとき、対象は物質であると同時に知覚でもある。その物質を認識するときには、外部に存在する知覚を追いかけるという意味で、身体は現在から過去へと繰り延べられる。しかし現実には、意思の存在によって、先取られた未来は行動が遂行されるまでにバッファとして消費される。この場合では、「認識をする」ことが完了するまでに、その未来は現在になってしまう。つまり、知覚が外部化することによってのみ未来は先取りされ続ける。ベルクソンは、この対象と知覚の場所の一致によってもたらされる意思なしの知覚を「純粋知覚 (perception pure)」と名付けた上で、現実には存在しないものとしている。

しかし、哲学者のジル・ドゥルーズは、映画という限定されたフォーマット上では「純粋知覚」が存在し得ると述べている<sup>4)</sup>。映画においては、離れた場所のショットをつなぐことができる。そのときにはあたかも視点が一瞬のうちにテレポーテーションしたかのように切り替わるが、身体が存在していない以上、それは可能となる。ドゥルーズの考えるこのような知覚は、ベルクソンの「純粋知覚」に対応するものであると考えられる。ドゥルーズは、前節で記述したような知覚—意思—行動という身体的な反応を誘発する映像を「運動イメージ」と定義した。同時に、それと対を成すものを「時間イメージ」と名付け、この映像においてのみ「純粋知覚」が実現するものであると述べている<sup>4)</sup>。運動イメージにおいて観客は、感情移入という意味で映画の登場人物に同一化し、観客が能動的に世界に参加する<sup>5)</sup>。それに対して、時間イメージにおいて観客は、受動的になる。哲学者・批評家である福尾匠はその様を以下のように記述する。「知覚はもはや行動へと繰り延べられず、世界への関与可能性を失った人物は『見者 (voyant)』になる」<sup>6)</sup>。つまり、未来を先取りし続けるために観客は、他者のための容れ物となり、対象を身体の内側に生成しなければならない。そこで観客は、その身体と同一化した対象と関係を取り持つこともなく、文字どおり「見者」となる。

#### 4. モジュラーとしての身体

現代のデジタル技術の発達によって、仮想世界の別の主体に身体が使役されるようなことが起こりうる。アーティストである布施琳太郎は、その例としてVtuberを挙げながら、現実世界の身体が仮想の主体のコントローラーになるさまを「モジュラーとしての身体」と表現している<sup>7)</sup>。

仮想世界に存在する3Dモデルと現実の身体が接続されることで仮想的な身体が構築され、それによってVtuberは仮想的な主体を獲得する。実際、現実の身体の動きにシンクロする3DCGによって構築された仮想の身体は、確かに

「私」の身体と認識できる。それは、主体のなかに対象が生成され「純粋知覚」が実現することによって、Vtuberが身体の内側となる。見方を反転させると仮想的な主体であるVtuberでも同様であり、現実の身体を使役しているといえることができるだろう。

しかし、この仮想的な主体は、現実の身体を司る主体と独立関係にあることによつてのみ、現実の身体はVtuberの一部となる。つまり、私はVtuberを操作するが、そのVtuberは私ではないという二律背反を許容することではじめて、私の身体は他者によって使役される。Vtuberへのさまざまなインタビューを通して、現実の主体と仮想的な主体とを切り離して、それぞれが独立した人格であるように認識することが一般化しているが<sup>8)</sup>、Vtuberという文化が未だ新しいものである限り、その定義が完全に定まることは無いだろう。

#### 5. 結

ヴァレリーによる記述によつて、主体と身体が分割可能であり、その状況においては、主体が未来を先取りし、それに伴つて身体は挙動することがわかる。

ベルクソンは、主体と身体において起こる反応を知覚—意思—行動と細分化し、さらに、知覚の所在を身体の外側に置くことで、未来の先取りの説明を可能にしている。その未来の先取りは、人間における意思によって消費されるが、ドゥルーズのいうように映画というフォーマットにおいては、その知覚の純粋性を保存したままに観客はイメージを認識することができる。そこで、観客は受動的な存在となり、他者を身体の内側で生成することとなる。

Vtuberのような仮想の主体が現実の身体を使役することを考えているとき、私はVtuberを操作するが、Vtuberは私ではないという二律背反を許容することが前提となることがわかる。

#### 参考文献

- 1) 伊藤亜沙：ヴァレリー 芸術と身体の哲学,水声社,2013.4
- 2) 内田樹：死と身体 コミュニケーションの磁場,医学書院,2004.10
- 3) ベルクソン：物質と記憶,岩波書店,2015.4,pp.69-70
- 4) ジル・ドゥルーズ：シネマ1 \*運動イメージ,法政大学出版局,2008.10
- 5) ジル・ドゥルーズ：シネマ2 \*時間イメージ,法政大学出版局,2006.11
- 6) 福尾匠：眼がスクリーンになるとき ゼロから読むドゥルーズ『シネマ』,フィルムアート社,2018.4,
- 7) 布施琳太郎：「第16回芸術評論募集【佳作】布施琳太郎『新しい孤独』」,美術手帖,2019.5,<https://bijutsutecho.com/magazine/insight/19775>, (最終閲覧日：2023.10.1)
- 8) リュドミラ・ブレディキナ：「バ美肉 バーチャルパフォーマンスの背後にあるもの」,現代思想,Vol.50,-No.11,2022.9